

当院スタッフのバーンアウト要因に関する調査 -職業性ストレス簡易調査票・ストレス対策調査の結果から-

(医) 衆和会 長崎腎病院

○米田千恵子, 田中初音, 高木志織理, 岩永敦子, 岩本まゆみ, 熊 博和,
久保純子, 白濱美和, 山中真樹子, 丸山祐子

【背景】

当院ではストレス対策として、キャリア開発・人間関係のサポート体制・休養などを継続しているが、患者の看護必要度は上昇しており、年次変化においてバーンアウト群は増加傾向となっている。

【目的】

バーンアウト要因を調査する。

【対象・方法】

全職員 173 名を対象にアンケート調査を行い、有効回答の得られた 153 名を対象とした。バーンアウト状況を BM 測定法で、健全群・警戒群・バーンアウト群に分類し、職業性ストレス簡易調査票とストレス対策を評価し、バーンアウト要因を解析する。

【倫理的配慮】

対象者に調査の目的と意義、プライバシーの保護などについて文書と口頭で説明し同意を得た。

【結果】

職業性ストレス簡易調査票では、バーンアウト群は「仕事量や質」よりも「職場環境・働きがい」にストレスを高く感じていた。ストレス対策に対して、バーンアウト群では、「ラダーレベルアップ経験者数は他群に比べ多かったが、ストレスもより感じる。」「仕事に関して気持ちを理解してくれる上司・同僚はいるが、存在価値を認められていると思わない。」「休暇は必要で仕事から離れている時間を大切にしているが、休暇中にも仕事のことを考えている。」という傾向がみられた。

【考察】

バーンアウト要因としては、職場環境と共に「ひたむきで自己関与が高い。」という個人の性格・価値観が強く関与していると考えられた。